

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと、風

第104号（2015年1月）

風に吹かれて（82）

白井啓治

『初春の雪空に何を思うか 雀二羽きたる』

昨年末に懐かしい文を目にした。

『自分の国だから我々は日本を批判するのだ。批判するのはよりよい日本をつくるためののだ。批判の無いところに未来はない。無批判に日本の良さなどというのはナルシズムだ。鏡の中の自分の顔をながめていい気分になっているような馬鹿と同じだ』

羽仁五郎の文である。

60年安保騒動後、文学者の戦争責任等と合わせて多くの本が出版され、私も随分と読み漁り、影響も受けたり反発を持ったりしたことを今では懐かしく思い出す。

フェイスブックの仲間がシェアした文にこれを見た時に、青春の頃の懐かしさに合わせて、これは今こそ我々がもう一度声を大にして言い直すことが必要なのではないかと、の思いに駆られた。

フェイスブックにもう一つ文が紹介されていた。

写真家福島菊次郎氏の言葉なのだろうか、「勝てなくとも抵抗して未来のために一粒の種でもいいから蒔こうとするのか、逃げて再び同じ過ちを繰り返すのか…」である。

小生、一輪の花しか咲かなくてもいいから、美しい花を咲かせたいとは常々思い願ひ、その努力を惜しまないようにしている。舞台に一輪、綺麗な花を咲かせてみたいと、絶筆したはずの筆をとり直し、

常世の国の恋物語百に挑戦を始めたのであるが、百には未だまだ先が長そうである。しかし、途中で折れたとしても種さえ蒔いておけば誰かが後に続くだろうと思っている。

年の明けて元日。

何となく雪のちらつきそうな天気。お猫様を抱いて庭に出て思った。

『老いた頭で年の初めに何を願う

梅の蕾はかたく』

梅の蕾はかたく』

この季節の梅の蕾同様に小生の頭は年々柔軟性を失い硬くなっていく。困ったことに喜怒哀楽の感性に中間の層が狭くなり、白か黒か、快か不快かの表裏になってきたように思う。白と黒とグレーの正三角形であった筈の思考感覚がグレーの辺の長さが増えたと縮まってきて鋭利な二等辺三角形になってきた。

鋭利な槍で気に入らない者を刺し殺そうと言う

思いは全くないのであるが、姑息・卑猥の下衆は殺せという感覚はますます強くなってくるのは矢張り歳の所為だろうか。

それはさておき、今年も相手の顔をはつきり見

## 明けましておめでとうございます。

### ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

て、言うべきことは確り言う年にしたいものである。自分の考え、思いをいう事に躊躇してはいけない。自由主義・民主主義の大前提は「たとえその考えに反対であっても、その言論を妨げようとする者が居たら命を賭しても守る」であること、肝に銘じてこの会も進めていきたいものである。但し、顔を隠しての放言は論外ではある。

## 羊年の初めに

兼平智恵子

ひび おだやかに

つつましく

じ慢はウールのコート 智恵子

明けまして二〇一五年、年のはじめの御祝詞を申し上げます。皆様には幸多き新春をお迎えになられた事とお慶び申し上げます。

当会報「ふるさと風」は皆様のご愛読に支えて頂き、昨年九月号で一〇〇号を迎えることができ、また新たな目標に向かって進んでおります。今年もご指導とご支援の程宜しくお願い致します。

今年の干支羊は「祥」に通じ中国の吉祥動物の一つで、群れをなすところから「家族の安泰」を表わすとされ、いつまでも「平和」に暮らすことを意味しているとされているそうです。

昨年も御嶽山噴火や広島での豪雨など一瞬にして多くの尊い命が奪われてしまった痛ましい災害が起ってしまいました。犠牲者の皆様のご冥福を心よりお祈り申し上げます。今年こそ羊にあやかつて人にも自然にも穏やかで、やさしい一年でありますように念じています。

昨年の石岡市内はテレビでの紹介で何回か放映されたお蔭様で訪れる方々が多く感じられました。それに、ほぼ元の位置に戻った陣屋門や石岡の歴史を愛する会のご尽力によって石岡金刀比羅神社の境内にたてられた正岡子規の句碑。こうして少しずつ茨城県より選定された「歴史の里いしおか」の理解が、市民の皆さんに深まってくように思います。

私事ですが昨年の十一月一日〜九日まで、まち

かど情報センターにて「歴史の里いしおかめぐり」の冊子に描いた、神社仏閣等のスケッチ画展をご高覧頂き「こんな所があったなんて」「そこに行ってみた」等々感想を頂き、興味を持って頂いたことが、私の一番の喜びでした。知ることで郷土愛も育まれていきます。

また昨年行われた旧市内の中町通り、旧近清書店跡にての石岡市特別写真展(看板建築と石岡の町並が、ひな巡りと一緒に行われ、そして一〇月半ばと二回行われました。これが大変な人気で一日に一〇〇人余りの見学者で賑わった日もあったそうで、近くに住む年輩の方々が三三五五集まって、昔話に華を咲かせ団らんとなったそうです。町の中の年輩がたは街おこしの大きな力となる事でしょう。

一〇月に行われた時は、私も当番として会場にいました。四十枚余りの写真は昭和三十年代のものがほとんどでした。その日は、早速に某新聞記者のかたに、どのような光景の写真か全部説明して下さいとの事、平成二年に石岡の住民になり、それに主催者側からの予備知識もなく、勉強不足でした。幸いにももう一人の当番の方が、石岡在住四十年余りでしたので、一緒に「この部分は今のどのへんだろう」「この方は今の若主人でしょ」当時隆盛だった頃を懐かしみました。

これから第三回、四回の開催の時には是非、商店街の現役を退いた先輩方の率先しての参加で、多くの方に語り継いで、大いに盛り上げて欲しいとご提案いたします。

今年も旧石岡地区を中心とする歴史を学びながら、できるだけ、各種のイベントに参加したいと思います。

今年で一八七年の命を誇る陣屋門、ほぼ最初建てられた形に補修された姿で、門戸を開けて皆様のお越しをお待ちしております。

## 駕籠かき家業

菅原茂美

こんなタイトルで、時代小説でも書けりや、私も円満な好々爺で過ごせるものを、すぐ調子込んで、人生というものを、分子生物学的観点から、もの申そうとするから、ややこしくなる。それは先刻承知であるが、古今東西、世の乱れを見ると、黙っていられないのが私の性分。文学・芸術等は、からつきし音痴。物理・化学に裏打ちされた自然科学だけがこの世の「真実」と信じるから、偏屈爺と言われても仕様がなない。

『エッサ・ホイ』『エッサ・ホイ』。駕籠の前棒を女房が、後棒を亭主が担ぐ。前棒をいたわり、後棒は駕籠に近い部位を担ぐ。肩は腫れ上がり、脚はくたくた、倒れる寸前。しかし脇目も振らずこれぞ天命と覚悟し、全てをかけて走り続ける。

さて乗っている客は殿様ではない。我が「子供」である。「過保護？」と思われるかもしれないが、よく考えてみると、いずこのいかなる夫婦も、山あり、谷ありの遠路を、駕籠を担いで懸命に駆け抜けているようなもの。客が一人前になり、自活できるようになるまで、懸命に駕籠かき家業を全うする。そうして育った子供がまたその子(孫)の駕籠かきとなり、それが達成された頃、我ら老夫婦は、用済みとしてこの世から消えていく。

感情を入れず、客観的に見てこの運び屋家業は、

代々続くが故に「種」は存続される。今日、人類の繁栄があるのは、歴代この駕籠かき家業の敢闘精神のお陰といえよう。

さてこれまで述べた「子供」とは何か？ それは即ち人間の設計図「DNA」の事である。駕籠という細胞の中に、「核」が存在する。その核の中にDNAという生命の根源が格納されている。親とはそのDNAという宝物を、傷つかぬよう後生大事に、次の世代にバトンタッチする役目で、その目的を果たせば用が済む。細胞の身の運び屋これが人生だ。用が済めば使い捨てにされ、植物なら子孫の肥料となる。全ての生物はこの原理に基づき、この世で生命活動を謳歌する。これはこの地球に生命が誕生して以来約40億年間、営々と続けてきたドラマである。

【46億年前、地球が誕生して直後この岩石惑星に、主として氷の塊である彗星や、小惑星が多数衝突してきて「水分」を供給。それで「海」ができた。さて生命の源となる有機物が、彗星などから同時に持ち込まれたかどうかは、今「はやぶさ2号」などが探索中。いずれにしても浅い海の底で40億年前、最初の生命は誕生した。元祖の細胞はA・G・C・Tという4個の塩基が色々組み合わせられてタンパク質を作る設計図を内包した。

その設計図DNAを薄い膜で囲み、新陳代謝をするうち、生命の元祖細胞は2分裂し、更にまた2分裂して、増殖を開始した。こうして単細胞は分裂を30億年間繰り返して、今から10億年前やつと多細胞生物へと進化していった。海中の植物が光合成で吐き出した酸素原子が3個重なって、天にオゾン層を形成すると、宇宙からの紫外線を吸収してくれるので、DNAは破壊されなくなり、

生物はやつと海中から陸上へと進出できた。6億年前、まず植物が上陸し、3億年前、脊椎動物が上陸を試み、魚類→両生類→爬虫類→哺乳類へと進化を続け、食虫目（モグラの類）から、霊長類が誕生し、700万年前、直立2足歩行する「人類」の原型が誕生する。こうして駕籠かき家業を何代も続け、DNAの鎖は無事継承されてきた。】

要するに「子」を育てるという事は、親は自分達に何億年も継続してきたDNAの強い「意志」により、コピーを絶やさず永続させようとする戦略に、まんまと載せられているという事。

という事は、ペアの夫婦とはそのDNAの単なる「運び屋」という事。DNAは我が身を健全に保持・増殖するために、細胞という生きた工場の中で新陳代謝を繰り返して、人類という「道具」を使って、大脳発達などという茶番劇を演じさせ、己の保身と増殖を図る。所詮、全ての生き物は、このDNAという物質の意図により、踊らされている「ピエロ」に過ぎない。

【人体は60兆個の細胞からなる。しかし人間は、腸管や体表に共生する60兆個の細菌の助けがなければ生命活動は維持できない。しかも自分自身の遺伝子は、わずか1%ぐらしか働かず、他はバクテリアの遺伝子に「おんぶに抱っこ」の形で生命活動は営まれているという。ならば、頭が良いか美人であるとかは、一体何が主役になって他と違うのか？ ノーベル賞受賞者と市井の凡人とはどこが違うのか？ つまる所、人間は自然の中で、特別の存在でも神に近い存在でもない。それゆえ、他の生命を絶滅に追い遣って、大顔して威張れた存在では決してないという事。】

DNAにとって、ペアは誰であつてもよく、原

型を崩さず、しっかり継続できればそれでよい。一旦、霊長類として進化の方向性が定まった以上、成長過程で再びカエルやモグラに逆戻りなどしなければ、それで充分。極端な先祖返りなど、進化の道のりを逆走する事がなければそれでよい。

たまたま協力し合つて、確実に子を育て、その子が長じてまた子を産み、育児に成功すればラッキーであり、任務は完了する。人類という「種」の寿命が、これから何万年続くかは知らないが、悠久の時の流れの中で、人生100年は、無数の人々が「タスキ」をつなぐ長距離駅伝競走の一瞬間を担う一コマに過ぎない。DNAは、真に自分勝手に強情者であるが、自分の鎖が切られないよう、セックスの快感と子供や孫が成長する満足感を、代償として与え、お札に代えている。

もし、DNAを繋ぐという難関事業に成功しなければ、それまで続いたDNAの鎖が残念ながら切れてしまう。人生いろいろで、子孫を残せなかった人もあるだろう。どうにもやむを得ない事情なら仕方がない。しかし、短絡的な思慮で、子孫を残す努力を怠ったのなら、これまで40億年、己の体に連綿と続いた命の鎖を、今ここで己の意思により断ち切った事になり、その意義は重く受け止める必要がある。40億年の鎖をしっかりと繋ぐ：それがこの世に生を受けた者の任務と言えよう。

\*

私が素直な人間であるなら、この駕籠かき夫婦を心から讃えたい。しかし、余計な事を学ばなければ知らずに済んだものを、動物行動学の本などを幾多も漁り読んでお陰で、『雄』というものの傍さを知った。子供は雌親が生んだのだから間違いなく遺伝子の半分はその雌からのものだ。しかし

雄にとつて、我が子だと思つて懸命に育てているのに、遺伝子は他人のものだったとしたら、これは悲劇である。(ヨシキリなど雌の遺伝子さえ残らず、カッコウの子を育てさせられている「託卵」)しかし、自然界では、こんな事は、日常茶飯事。遺伝子の「多様性」が気候変動等、自然の猛威に曝されても生き残る原動力となつている。自然選択で、強い者は生き残り、環境の変化について行けなかつた者は、この世から姿を消す。

さて、何千kmも渡(わたり)をするツバメにとつて、生まれた子が、もし弱い遺伝子を持った我が亭主の子ばかりだったら、長旅の途中で子は全滅の可能性もある。半分くらいは婚外子であつたら、それが生き残るかも知れない。種を維持するに足る何割かが生き残れば、不倫も道徳となる。

人類は、もつと寛大な精神を持つて、夫婦は焼き餅など焼かずに、3人子供がいたら一人ぐらいは婚外子でもよいのではないか。そうすれば嫡子らは草野球選手でも一人ぐらい「イチロー」が生まれるかもしれない。遺伝子の多様性こそ、生物繁栄の基本原理である。なぜ人類だけがこんなにシャツチョコバツテ、変な「道徳」などをこの世に創り出したか。長年の環境汚染により、人類滅亡の危機に立たされたら、「純血」とか「貞操」とか、空念仏を唱えている場合ではない。生き残りをかけ、何でも挑戦しなければ、子孫は絶える。

こんな事を平気で主張するなら菅原という人間は相当のドンファンで、ならず者と思うかもしれないが、本人が言うのもなんだけれど、至つて正直で、小心者である。我欲のために人を泣かすような事は、断じてやつてはいないつもりである。

さてツバメは、亭主に巢守りをさせ、妻は、セ

ツセと華麗に宙を舞いながら、他の雄と不倫を重ね、その卵を亭主に温めさせ、子育てをさせる。知らぬは亭主ばかりなり。ツバメの雌はしたたかである。近來のDNA検査技術の進歩により、これらのことが明白になった。ツバメの妻の不倫相手は、決して若くてカッコイイお兄さんではなく、既に子育て実績のある雄をしつかり選ぶという。若し燕を選ぶ有閑マダムなど、進化論上は愚の骨頂である。実績こそ、どんな空論にも優る。

オシドリ夫婦の連れ添う姿を「鴛鴦の契り」などと讃えるが、あれは仲が良いからいつも寄り添つているのではなく、妻が不倫のため逃げ出すのを夫はしつこく見張つているだけのこと。科学的事実を重視するか、文学的美辞を重んずるか？

【一方、人類の今日の繁栄も、多少はツバメと類似の行動をとつていた可能性がある。単婚(モノガミー)一夫一妻は人類の歴史を顧みれば、かなり古いようではあるが、ある科学者の調査によれば、現在、世界849の民族(言語による)の80%は一夫多妻であるという。しかし実際に複数妻を持つ男の割合は2割ぐらいの事。一説によれば、一般に動物は、雌雄の体重差が大きいほど一夫多妻傾向が強い：という。人類の平均体重の男女差はおよそ20%と言われるので、2割ほどの男は、妻以外の女性を持つ事は、生物学的許容範囲：と言えるのであろうか？】

真面目な話、人類は太古において、今のチンパンジーのように多夫多妻の乱婚であつた。このような遺伝子の多様性確保という原動力がなければ、人類の今日の繁栄はなかつたかも知れない。

百獣の王ライオンは、一頭の雄に多数の雌の家族構成のように言われるが、実は権力者の王は、

一頭だが、補佐的な雄は複数居り、テリトリーのパトロールなど数頭のオスが担当している。一頭のメスは一発情期にトータル<sup>100</sup>回近い交尾を行い、複数の雄の多数の精子を混ぜ合わせ、競争させて受精させるといふ。これが生物本来の姿かも：。

\*

さて今更、乱婚奨励の先棒を担ぐつもりは毛頭ないが、人類は中途半端な知能でこんなに地球環境の汚染を続けると、人類の活力は自然と衰退し、滅亡に邁進する可能性もある。現在世界人口70億人は、全ての哺乳類中、最多のポピュレーションである。この人口を養うためには、地球が1個必要といわれる。人類は己の人口を自ら制御できないのなら、高等生物とは、とても言えない。

カナダの森林狼は、鹿など食糧が少なくなると、ペアリング数を減らし、厳粛にそれを守る。食糧が豊富ならペアリング数は増え、子供の数が増える。一方人類は食糧が有ろうが無かるうが、むやみやたら子造りが行われ、この地球からこぼれ落ちそうである。毎年世界人口は8500万人ずつ増え続けている。小さな島でバツタがやたら増え草を食べ尽すと、一斉に海に向かって飛び立ち、集団自殺をするという。人類もバツタ並の知能しか持たない低能生物なのか？

さてこの惑星が、人類という独善的な生物により占領され、汚染物質で満ち溢れると雄の活力が減少し人類滅亡が早まる可能性がある。尤も、競争する事しか能のない雄共が、やたら幅を利かしているのなら、性的二型で、オスは矮小化するのも結構である。オニアンコウみたいに、「矮雄」は雌に皮下寄生し、雌の血液循環に頼り、生存する

様式も結構かもしれない。生命繁栄の根源は所詮「雌」にある。雄は後から生まれた付属的なもの。

※

生命活動の源であるミトコンドリア(細胞内エネルギー生産工場)は、受精の際、精子から卵子に持ち込むことはできない。ミトコンドリアは、常に母の子であつて、父の子は存在しない。

更に人間の雄を決定づける遺伝子は、Y染色体にあり、Y染色体は、対するX染色体の10分の1ほどに委縮し、間もなく崩れ去りそうである。霞ヶ浦の銀ブナは雄がいなく、雌性生殖という方法で子孫を残している。人類も雌ばかりが強くなり、雄がへこたれていくと、雌性生殖という機能を獲得しない限り、絶滅がそう遠くない気がする。

【私は50年ほど前、結婚する時、もし私自身の身体的不具合が元で、妻を不幸にしては済まないと考え、私の生殖細胞「精子」の徹底的検査を自分で行った。私は行政獣医師なので家畜改良増殖法に基づき、「種牛・種馬」等の精液検査は日常業務の一部であつた。私は自分の精液の量・精子の数・PH・活力・奇形率・運動能力などを検査し、いずれも正常なので、私自身が不妊の原因にはならない事を確認した。妻となる人は極めて健康そうなので最初から信じていた。今時なら、遺伝子検査をして、確認を取っているかもしれないが、当時はそんな技術は存在しなかった。今考えてみると、私は「命の連続性保持」という事を、20代の頃から重要視していたのかな…と思う。】

経済動物である家畜において、優秀な子孫を多数増やす為に、改良センター等は「後代検定」という手法を用いる。それはこれまで改良を加えて、将来その地域の繁殖の主体となる「種牛」候補等

から精液を採取し、冷凍保存しておく。そこで、その精液を一般雌牛に試験的に人工授精し、その子供が優秀な成績を残せるかを検定する。即ち父親の遺伝能力を調べる。もし子供の成績が優秀なら候補牛は本格的な種牛として活用される。逆に子供の成績がよくなかったら、ストックした冷凍精液は廃棄され、候補牛そのものも淘汰される。独裁政治の国だつたら人間にも適用か、おっ怖い。

※

性に関する道德の厳守は、どんなに自由主義や、経済が発展しようとも最重要な事柄である。伝染病の媒介や、女性の尊厳を踏みにじる事例があまりにも多過ぎる。私の孫5人(2組で14、26歳)はいずれも女子なので、その事が特に気にかかる。最近の報道によると、今アメリカで、超一流有名大学の新入生歓迎会などで、未成年女子が強引に酒を飲まされ、侵される事例が多発。大学も評判を気にし、真剣に対策など講じない。被害者も、なかなか裁判などで控訴しづらい。闇に葬られるには、あまりにも重大な社会の病理である。

また子育てに関し、見逃してならない最近の現象は、子を思う親の心を逆手にとつて、振り込め詐欺など極悪の事件があまりにも多発している。子供が万策尽きて、鳴き声で親に助けを求めてきたら、大方の親は冷静さを失い即時対応したくなる。そこを狙い目とは、真に卑劣である。断じて許せぬ。老後に備えたわずかの蓄えを、まんまと横取りするとは、悪党の風上にもおけない。また、子供を虐待する親がいるとは何事だ? 何の抵抗もできない幼子に食事もろくに与えず、3歳児が、わずかに8kgとはなんたること。胃袋には、タマネギの皮と銀紙が残っていたという。ど

明けましておめでとうございます。

### ギター文化館 2015年コンサートシリーズご案内

- 2月 1日 (日) リカルド・モヤーン・ギターリサイタル
- 2月 11日 (水) デュオ・メリス・ギターリサイタル
- 3月 1日 (日) 森万由美アルパ・コンサート
- 3月 22日 (日) ウーマン・オブ・ザ・ワールド
- 4月 5日 (日) 大萩康一&小沼ようすけ
- 5月 3日 (日) ギター文化館所蔵名器コンサート
- 5月 30日 (土) 國松竜次ギターリサイタル
- 6月 14日 (日) 高橋竹童津軽三味線コンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35  
Tel 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628

れだけお腹をすかしていたことや、新聞記事を読みながら他人事でも涙が出てくる。警察で、その母親は、イケシャーシャーとして、日に3度しつかり食事はやっていたと発言。母は19歳で、子は3歳。世の中どうなつてんの?

明けましておめでとうございます。  
本年も宜しく願っています。

オカリナアートJOY 野口喜広  
行方市浜24605 Tel 0299-55-4411

あけましておめでとうございます。風の会もや  
つと三回目の正月となりました。これからもよろ  
しくお願い申し上げます。

さて、今回は天狗の話の三回目です。

土浦の方から125号線で銚子の方に向かうと、途  
中の美浦村を過ぎ、稲敷市に入ったところに「阿  
波」という地名がある。読み方は「アワ」ではな  
く「アバ」である。

この阿波に「大杉神社」という神社がある。通  
称「あんばさま」と言う。社殿の彫刻などがかな  
りこっけていて色彩も豊かである。

この大杉神社は名前の通り御神木が大杉なのだ  
が、美浦のトレセン(競馬)の守り神ともいわれ、  
騎手など競馬関係者が良くお参りしている。そし  
て、この神社は関東から東北地方に多くある大杉  
神社の総本山である。

この祭神が天狗だと言うのだ。

その歴史については、神社のHPに書かれてい  
る内容をかいつまんで紹介しよう。

1、大杉神社の場所が昔の今の霞ヶ浦がまだ内海  
(香取の海)であった時に、その海に突き出した  
半島で、島のような形をしていたので、『常陸風  
土記』には安婆嶋と呼称された。

2、この一帯にはかつて菟上之国という小国があ  
った。菟上国は海運で成立した小国であった。

この時に神社の大杉は「あんばさま」と呼ばれ、  
信仰の対象でもあり、交通の目印の役割を果た  
していた。

3、その後、北方の仲国から南下してきた一族が  
鹿嶋、香取の両神社を築き、東岸域を支配した

ため、交易権や、支配権が移ったが、一般民衆  
の間では海河守護の神様として信仰が続いた。

4、大杉大明神として御神木の杉があるが、こ  
れが天狗の木と解釈されており、鳥居の左右に  
天狗の石像がおかれており、鼻長の大天狗とも  
う一つは鳥(からす)天狗である。

なぜ天狗なのかというと、この寺にいた常陸坊  
海存(海尊)と言う僧が、数々の奇跡をおこして信  
仰を集めたが、ある時(1189年)すがたをくらませ  
てしまった。この海存の姿かたちが天狗のような  
風体であったらしく、この僧を天狗として祀った  
のが始まりだという。

地名の阿波(あば)も当然四国の阿波(あわ)を連  
想するが、しらべても関係はわからない。

鈴木健さんの書かれた「日本語になった縄文語」  
によると、母のことをさす言葉に「アボ」「アバ」  
「アツバ」などと沖繩・青森・新潟・鹿児島など  
に残されているという。

しかし、この言葉の元は「乳首」のことだとい  
うので、乳児が最初に発音する「パアパア」など  
がその更に元になっているのかもしれない。

この場所が昔半島でつながっていたが、島のよ  
うに見えたというので、どこか乳首を連想させた  
景観であったのかもしれない。

さて、大杉神社の入口には鼻高天狗と鳥天狗の  
大きな像が置かれています。その隣の安穩寺(安  
念寺)入口階段の右側には「常陸坊海存」の石柱が  
建てられています。

この安穩寺は大杉神社の守護するために延暦  
24年(805年)開基され、明治になるまで大杉神社は  
安穩寺が管理していました。

さて、この常陸坊海存というのは、武蔵坊弁慶

と同様に源義経の郎党と言われる謎に満ちた人物  
で、数々の伝説が伝わっています。

義経が奥羽平泉で追手と僅かな兵で戦っていた  
時、仲間の十一人の者が戦に加わらず近くの山寺  
に行っていたと伝わっていて、この中の一人がこ  
の常陸坊海存であり、名前が記録されているただ  
一人の人物です。他の者は名前も伝わっていない  
のに海存一人がどういう訳か後世に名前が伝わり  
400年も生きていたというような話まで伝わって  
います。

義経の逃避行で案内役をしています。詳細が全  
く不明で、肝心な時には何時もどこかに身を隠し  
てしまうという。そういうところがこのような伝  
説を生むのかもしれない。

特に会津の実相寺の禅僧に残夢(ざんむ)という  
人物がいて、源平合戦の話をもろでそこにいた人  
のように鮮明に話したため、この人物が海存では  
ないかと言われるようになったという。これに伴  
って江戸時代の1500年半ばまで生きていたかのよ  
うなうわさが広がったともいわれています。なに  
しろ天狗ならこれくらい長生きしてもおかしくな  
いと当時思われていたのかもしれない。

もう少し詳しくこの大杉神社、安穩寺に伝わる  
話を神社HPより紹介します。

「文治年間にはその容貌が巨体、紫髭、碧眼、鼻  
高であった常陸坊海存(海尊)が大杉大明神の御神  
徳によって、数々の奇跡を示したこと、海存  
は大杉大明神の眷属で、天狗であるとの信仰へと  
発展いたしました。当初は鳥天狗を御眷属として  
おりましたが、後に陰陽一対として鼻高天狗、鳥  
天狗の両天狗を御眷属とすることとなりました。  
現在ではいかなる願いも叶えて下さったと伝えら

れる海存の奇跡に由来して、大杉神社を日本で唯一の「夢むすび大明神」と称し、鼻高天狗は「ねがい天狗」、烏天狗は「かない天狗」と呼ばれるようになりました。」と書かれています。

形相を真似て作つたら天狗の形相になつたというもので、さらに、「時代は下つて、江戸時代初頭には当時江戸崎不動院(齋敷市江崎)にあつた天海に雨をもたらず奇跡を与えた神社として知られ、以降天海は安穩寺の住職となり大杉大明神に仕えました。このため安穩寺および大杉神社は天海が住職を務める、上野寛永寺や日光輪王寺の直兼帯となり、明治になるまで輪王寺宮の兼帯するところとなりました。」とも書かれています。

徳川家康が江戸の町造りや、家康の墓所を日光に選定するのに絶大な力を発揮したといわれるあの「天海」大僧正です。江戸崎に会津で伊達正宗に敗れた佐竹義重の息子芦名盛重がやって来た時に、この天海和尚を呼んだとされています。

さて「海存」伝説を石岡と真壁の市境の山「足尾山」にも見ることができません。

足尾山は常陸風土記や万葉集などで「葦穂山」「安之保山」「小初瀬山(おはつせやま)」と記されています。万葉集が詠まれた頃の「新治郡」は常陸国の西部にあつて、現在の桜川市、筑西市などの領域です。この新治郡衙跡が筑西市古郡(ふるこおり)地内(協和台地)に発見され、昭和43年に国の史跡として登録されています。

この新治郡から常陸国国府(石岡)に行くにはこの足尾山(小初瀬山(安之保山))を越えて行ったものと考えられます。自然にいろいろな伝説が生まれるべきものがあつたのでしょう。

足尾山の山頂近くに足尾神社(石岡市小屋字足尾山)

の拝殿があり、山頂に本殿の祠があります。

前に書いた通り足の病にご利益がある神社として信仰を深めていきますが、常陸風土記に出てくる「油置売命(あぶらおきめのみこと)」がこの山の石城(いわき)に眠つていたと伝えられます。油置売命というのは眠れる森の女神なのか?誰が歌つた歌なのか?不思議です。

「言痛(こちた)けば をはつせ山の 石城(いわき)にも 率(い)て箆(へら)もらなむ な恋ひそ我妹(わがも)」

何故、このような歌を常陸風土記は紹介しているのでしょうか?

奥に隠されたものがありそうです。山の峠を越えて行くのにはいろいろなことがあつたのでしょう。女神であつたのか山姥であつたのか、それとも若い男が姿を消してしまつたのか?

もちろんまだ大和朝廷に組み込まない人々が山の中に住んでいたのかもしれない。

筑波山の男体、女体の山の隣りでそつぽを向いたように(葦穂のように)反り返つていた足尾山は数々の歌に詠まれていました。醍醐天皇が足の病が治る靈験あらたかな神社として日本の国家を建てた柱の神「国常立尊」(くにとこたちのみこと)、面足尊(おもたるとのみこと)、惶根尊(かしこねのみこと)を祀り、信仰を集めるためにこの修験者のいる山を選んだのかもしれない。

さて、この山と「常陸坊海存」との関係ですが、文治年間(1185~1189)に常陸坊海尊(存)がこの足尾山に籠り、杉室に修行したという伝説が残されています。現在も杉室に神窟があり、小さな祠が祀られているそうです。この海存をこの山の修験者

として「足尾権現」の流布・宣伝することで、北陸方面へ足尾信仰を広め天狗伝説も伝わっていったものと考えられるのではないのでしょうか。阿波大杉神社は別名「杉室神社」とも言われているそうです。

ところで、大杉神社の眷属が天狗であるのですが、この天狗を眷属としている神社がもう一つあります。それは金刀比羅神社です。海の港を見下ろす高台に多くは祀られており、海運の守り神として信仰を集めています。象頭山金毘羅権現も修験道が盛になると眷属は天狗とされたといえます。

さて天狗の話はここで終わりです。

さて、石岡出身で風の会の読者である横浜在住の方より昔の石岡小学校の思い出の記事を送っていただきましたので紹介します。私はこの町の出身ではありませんが同じ世代に横浜や東京多摩地区の小学校に通いました。きっと当時の事を思い出し懐かしく感じる方もおられるでしょう。

石岡小学校の戦跡

八条忠顕

私は昭和三十年代に石岡小学校に在籍し卒業した。学校の場所についてはこの風の会誌をはじめブログなどにより、今ではその歴史がかなり知られるようになったようだ。常陸の国衙があり平将門に攻められた、佐竹の軍勢に蹂躪された、と戦乱の歴史がまとめられ目に留まるようになった。

しかしここに述べるのは大東亜戦争時の痕跡である。石岡小学校に在って全校の児童が日々目にするものであつたが、現在では残っていない。



石岡小学校の校舎はかつて木造の校舎だった。古い部分は明治四十三年に建てられた平屋。その後昭和七年に木造2階建ての「新校舎」が増築された。新校舎という呼び名は昭和三十年代にもあたりまえに使われていたから、戦後生まれの我々児童は、新しい校舎だから最近できたのだろうと単純に疑わなかったが戦前のものだった。戦跡はその新校舎の壁にあった。木壁ではなくコンクリートの控壁にあった。

控壁といっても耳なれない建築用語だが建物を補強するためのコンクリート製の幅の狭い壁で建物の隅などに壁と直角に出張しているもの。似たものをいえば、ブロック塀を補強するために壁と直角に一段積みを設置する、あれである。

そのひとつの控壁に機関銃の弾痕が三つ開いていた。場所は新校舎の西北の端で、子供の背丈より低いところにあった。控壁は厚さが二段になっており、地面に近いほうは十数センチ、上のほうは七、八センチだった。

一発の弾は上の薄い部分を貫通し、子供のこぶしが通るほどの穴があいていた。

下のほうは貫通せず直径十センチ程すり鉢状にえぐられ、中の鉄筋が半分切断されて露出していた。あとの一発は薄い部分の端を削り取り、半円形の切り欠きができていた。これが石岡小学校にあった大東亜戦争の戦跡である。戦後十年以上経ってもそのまま放置されていたのは、構造的に問題ないし、修復には手間と費用がかかるしと判断されたものか。当時二千人ほど居た児童みんなが目にしていた。

子供でもそれが機関銃の弾痕だと、教わらなくてもわかった。そしてこの場所に戦闘機が飛んできて機関銃掃射したことを。

親から聞いた戦争体験によると、石岡は爆撃は受けなかったが艦載機によって駅傍にあったアルコール工場と駅に停車していた貨車が猛然と機関銃掃射をうけたとのことだった。そして、小学校のそばで子供が撃たれて亡くなったんだよと聞いた。小学校校舎の弾痕がそのときの掃射の跡かどうかは知らない。

弾痕に手を触れ、貫通した穴に手を差し込み、切断され錆びた鉄筋に触れて子供心に感じたことは今でも思いたす。それは怖いとか悔しいとか、そんなものは全くなって、そこにそれがある、他所で決して目にしたことのない凄惨な暴力のあとが自分の学び舎にある、という認識だけだった。卒業してからいつだったか訪れたとき見たら、セメントで穴が埋められていた。

その見え方は全く違った。単なる瑕疵修復のあとがあるだけだった。現在では弾痕とともに木造校舎自体が消えて久しい。

この子供のときの経験から思うことは、実物を見るのは写真やつくり物を見るのとはまったく別の心象を引き起こすということだ。戦後の日本が戦前を完全否定して「良い子」の国になってしまったのは、単純に占領軍司令部の七年におよぶ指導が奏功したからではなく、それを受け入れる日本国民があったからだ。

日本国民がそうなったのは、空襲でほとんどの

都市が壊滅させられたという巨大な暴力を直接身にうけて、それが「在ること」を観念でなく直接注入され思考停止した国民になっていたためだと、自分の経験から思う。戦跡に限らず、意味あるものを実物で残し触れさせることのおおきさを思う。

## 一枚の絵から

伊東弓子

合併寸前に作られた「玉里村の歴史―豊かな霞ヶ浦と大地に生きる」の中に、高崎、矢口家（下河岸蔵の、河岸のある風景という一枚の絵がある。向う場と霞ヶ浦を背景に屋敷が描かれている。蔵や母屋、大小の門、屋敷奥の水辺には八艘ちかくの船が帆を下ろしている。垣根や庭木、松等も河岸の繁栄ぶりが表現されている。川は御留川の制度が廃止され新しい時代に向う顔をもちながらも、まだまだ水運を中心にした河岸と、豊かな漁場としての漁船が何艘も描かれている。（明治初期の絵と推定されている）今回は、御留川を歩く会の資料の一つとして提供する為に改めて丁寧に見た時の感動だった。

この絵を通して水辺から陸へ、河岸から蔵へ運ばれたこと、河岸から江戸へ幾多の苦勞をしただろう男や女のことを身近に感じた。私が小学生の頃合った三人の老人の姿も、その中の人達と繋がるように思えてきた。

三人の爺さんはよく似ていた。背が高く痩せていた。三人とも腰は曲っていなかった。坊主頭が光っていた。畑で合ったり、田や尋ねて行った家



で合った。住人は谷津田の向うに住む人が一番若く、二人の家は隣り同志に並んでいた。どの家も前に木々があつて陽が射すのは西日がやつとという程度だった。三人は兄弟かな。何代か前に兄弟だったのかなと不思議だったことを覚えている。三人の爺さんと山の前の大屋敷と河岸との結びつきを考えて物語を編んでみた。

いつの頃か、老夫婦と子供三人を連れて若い夫婦が河岸へやつて来た。河岸の口利きであった。取り敢えず老夫婦は河岸の物置の下げに住み、河岸屋敷の下働きをすることになった。若夫婦と男の子三人は台にある大屋敷の裏山にある木小屋を手入れして住むことになった。新しい生活の始まりは前途多難に見えた。人では幾らでも欲しいとのこと、子供も連れて行くことにし、母親は当面住居を整えることにした。荷車は借りることになった。

河岸から大屋敷へ、大屋敷の蔵から河岸の船に、その日その日の數量を運ぶのだった。子供達は上り坂、下り坂には結構力を発揮してくれる。引いたり、押ししたり、ぶら下がったり日に日にコツを覚えて、父親は大助かりだ。昼には握り飯が出る。大人二つ、子供は一つ。父ちゃんは一つたべて、一つは母ちゃんに持つていくのが常だった。雨の日も仕事はあつた。そういう時は三番目は母ちゃんと留守番。甘えん坊は何かいいこととしてるかな、と勘ぐつたが、暖かい汁と乾いた着物を温めておいてくれた。

空車で行く時は、木の枝や松ぼっくり、杉っばを積んで爺ちゃんに届ける。とつても喜ぶ。爺ちゃんは仕事の合間に「あかさか川」の漁を見せてくれる。出ていく船、戻る船、隣りの中河岸、そ

の先の上河岸、奥に高浜河岸のある話しもしてくれる。婆ちゃんも暇をみて、宿添いに並ぶ店を見せられる。

帰り時、婆ちゃんは必ず「またこうな」と言う。三人は打ち合わせたように「あいよう」と答える。途中でいろんな人に合うのも嬉しかった。大屋敷に行く女の子と母親によく合う。三番目が「おめえんとこ、父ちゃんいねえのか」と言うと、女の子は「いるよ、あんたらんとこ母ちゃんいねえのけ」と聞き返す。そうすると二番目が「いるよ」と答える。

畑や田圃で部落の年寄によく合う。「爺ちゃんおはよう」「婆ちゃん、こんにちは」と大きな声で挨拶する。「おはよう、元気だな」「こんにちは、でつかい声でいいな」と返事が返ってくる。ますます気をよくして歩く三人だ。一番きつい坂の所で「ああ！ 有難い。背中を押してくれた」と父親が呟くのを何度か聞いた。尋ねると、坂の途中で蛇が横切るのを見た瞬間、車を止めて過ぎて行くのを待ったという。再び引き出すには大分力が必要だったが轢かずによかったと思つたと話す父の優しい心を感じた。

そんなことがあつてから、そこにさしかかると誰かが背中を押してくれるような気がするという。夏の汚れは川で流し、冬の寒さはみんなまで寄り添っているほかなかつた。貧しい中でも仕事があつて、檀那さん達の温かさで救われた。

大分仕事にも慣れた頃、上玉里村照光寺の年貢米を笹目河岸に運ぶ仕事が出来た。初めての道だったが、天気もよく気持ちよかつた。住職さんは体が大きく、力持ちで積むのを手伝ってくれて話しが弾んだ。市街道は府中へ行く人、大井戸へ

行く人の姿が多かつた。富士峰の坂は長く急で恐ろしかったが、子供の手助けで大助かりだった。

下りきつた所に亀井があつて、ひと休みしている人がいた。湧水を飲んだり煙草を吸ったりしていた。高浜の町はもうすぐだ。街は賑わっていた。河岸も多く、でつかい荷車もあつた。何人で引くのだろう。威勢のいい人達もいきいきしていた。もう一往復しなければならぬ。近道をして谷原道を行くことにした。川の水が増せばこの道も見えなくなり、川と田の境も姿も消すのだろう。大働きの一日が終わつたのは陽が沈む頃だった。

その後、大屋敷と河岸の荷を運ぶ日が続いた。老夫婦は年をとり、子供達は遅しくなつてきた。夫婦にとつても感じるものが増えてきていた。

そんなある日、河岸の檀那さんが驚沼新田づくりの援助をしたいという決意が知らされて、忙しさが増していった。五つの村を越えるのに半日かかるのとみた。人手を多く募り、湿地帯での作業となるので時間がかかる。天候にも左右され、難行した事業だった。完成した頃には河岸の檀那さんの疲れもひどかつたが跡取りを始め、多くの人の力に支えられて元気になられたようだ。

何十年の月日が流れたろう。夫婦はすっかり年老いた。長男が父の仕事を継ぎ、次男は船乗りになつて江戸へ行く日も多かつた。三男は百姓の仕事始めた。それぞれ連れ合いも出来てチツクに所帯を持った。

無一文から始まつた家族が、生命を長らえてやつてきたのは、数多くの条件に恵まれたことが主だったろうか。人(家族) 其の物が踏ん張つて耐えてきたからだろうか。

高浜に入る船が少なくなつた。河岸につく船も

日に日に数が増えることはなかった。運送船も通らなくなった。川の姿も変わった。漁も行わなくなった。その代り汽車から電車に、そして自動車が流れをつくって動く道のようになった。市の東の外れに飛行場が出来た。皇族、政府専用機、ドクターヘリのようなものが、地域で、個人で、自家用機などが出来ていくんじゃないだろうか。人の発展しようとする影には傲慢さが出てくる。恐ろしいことだ。人には謙虚さが欲しい。

今、河岸の人も、大屋敷の人も、私の想像した人達もみな代替わりし、現存している。時代が変わっても人間として必要なものは失わないでいきたい。

## 東京の島

小林幸枝

新年おめでとうございます。今年も、ふるさと風の会、そしてことば座をよろしくお願い申し上げます。

私は、離島の旅が好きで毎年出かけていますが、そのほとんどが南国沖繩、奄美方面でした。

離島を旅してくると、何故か気持ちに余裕が出来て、手話舞のイメージ創りにも良い影響を与えて貰っていました。今年もどこかの島を旅行したいと色々な旅行パンフレットを集めていましたが、そこに東京の離島を紹介するものがあり、興味を覚えてちよっと調べてみました。小笠原諸島は、気軽に浮かせることが出来るそうもないので、まずは伊豆諸島について調べてみました。

伊豆諸島と言うと大島や三宅島を思い浮かべま

すが、その他にも沢山の島があることにビックリしました。離島への旅を思い描きながら、調べてみた事の一部を紹介してみたいと思います。

### ○伊豆大島

伊豆大島は東西9 km、南北15 km、周囲52 kmの牡蠣殻を伏せたような形をしており、伊豆諸島最大の島です。人口は約8000人。樺の島として全国的に有名で、名所旧跡も多く、一年を通じて沢山の観光客が訪れています。毎年1月下旬から3月下旬まで大島樺まつりがおこなわれています。

### ○利島

利島は周囲7.7 kmと言う小さな島。人口も300人ほど。しかし、日本一の樺島と呼ばれ20万本もの樺の木が島を覆っています。この島は、今イルカウォッチングとしても注目を集めている島です。

### ○新島

新島は東京から南に約160 km、伊豆下田から36 kmに位置にあります。住所は東京都新島村。若者達には、サーフィンや海水浴場としての人気スポットです。この島には、イースター島に倣ってモアイ像が立てられ、海の彼方を見つめています。

### ○式根島

式根島は、周囲12 kmと小さな島ですが、リアス式海岸を持つ緑豊かな島です。人口約5000人ですが、豊かな水産資源と温泉の島です。島歩きを楽しんだら疲れた体を温泉に休ませられます。式根島の海は翡翠の海ともよばれていて、温泉に浸かりながら眺める海は絶景です。

### ○神津島

神津島は、日本百名山に選ばれた天上山を持つ

島です。自然浸食によって削られた山は「裏砂漠」とも呼ばれ、月面のような頂上の景観は不思議の世界に運んでくれます。夕陽の中、遠くに見る富士山も絶景です。火山列島なので此処も豊富な温泉が湧いています。

### ○三宅島

三宅島は、火山博物館ともいえる程噴火の続いた島です。江戸時代には流人の島としても知られています。最近の三宅島の噴火歴を見ますと2000年の噴火から遡って行くと約20年周期で噴火が起こっています。2000年の噴火では雄山山頂にあった八町平と呼ばれていた旧火口が陥没し、新しく深さ400mのカルデラができましたが、山頂付近は危険地域に指定されており立ち入ることは出来ません。

### ○御蔵島

御蔵島は、東京から約200 km南の太平洋上に浮かぶ島です。島は御山を中心としてほぼ円形をしており、島全体に原生林が広がっています。島固有の植物も多く、自然観察の楽しい島です。島には温泉もあり、山歩きと温泉が楽しめます。また海はイルカウォッチングの楽しめ、魅力満載の島と言えます。

### ○八丈島

八丈島は、山歩きの島ともいえます。三原山と八丈富士という二つの性質の異なる山をもっています。三原山は、亜熱帯植物の群生や滝などの景観を楽しむことが出来ます。

八丈富士は頂上に広がる大パノラマと火口を一周する「お針巡り」が楽しめます。八丈島も火山島の恵みである温泉が多数あり八丈名湯と呼ばれています。

○青ヶ島

青ヶ島は、伊豆諸島の有人島としては、最も南に位置する島です。青ヶ島は世界でも珍しい二重式火山でできた島で、日本一人口の少ない村としても有名です。

今まで島への旅行は沖縄方面ばかりでしたが、東京の島巡りも魅力的であることが分かりました。東京の島は、此処に紹介した以外にも魅力的な小笠原諸島もあります。昨年、噴火で出来てきた新島も上陸は出来ませんが、海から眺めて見たものだと思っています。

私にとって、島巡りは、舞のイメージ創りのための栄養です。今年もどこかの島へ出かけてきたいなと思っています。

### 【風の談話室】

寒波と共に新しい年がやって来た。

無駄使いと言われても仕方のないような衆院選で一年の締めくくりになったが、衆院選の所為とは言わないが茨城県議選も国政選に引きずられて論点の見えない淋しい選挙となった。

衆議員の解散権は総理大臣の宝刀とは言われているが、昨年末の解散総選挙は、宝刀を抜いてみせた最高権力者の自己都合だとの批判もある。

さて新年号は、皆さん忙しく、読者投稿へはお一人だけとなった。養生日記として作文、詩を書いてくださっている堀江さんには、継続して投稿いただけることを願っています。

陸平を「マイシヨ」する会の田嶋早苗様より年賀状が

届き、「八十路婆十年日記買ひにけり」とあった。今年もまた味わい深い文をお送りくださることを楽しみにしております。

当会では皆様からの投稿をお待ちしております。投稿には、住所・氏名・電話番号・メールアドレス等を明記して頂くことをお願いいたします。掲載に当たってペンネームをご希望の方は、ペンネームも添えてください。投稿の内容に関しては、自由です。原稿は5枚程度希望しますが、長くてもかまいません。但し、長文に関しては、編集室で二度或いは三度に分割して掲載させて頂きます。

### 《読者投稿》

養生日記（詩二編）

堀江実穂

『愛を下さい』

寂しがり屋な私がいる  
あたたかい温もりを求めながら  
心でいつも叫んでいる  
お金では買えない大切なもの

あなたの笑顔

あなたの明るいエネルギー  
あなたの気づいていない素敵なところを  
私が全部見つけてあげる  
あなたは私にいつばいの愛を下さい

あなたの愛で私の心は温かく膨らんでいく  
美しい花を咲かせようと膨らんでいく

『失恋』

冷たい空気が流れて行く  
冷たい風が吹き抜けて行く

あの時二人は幸せだった

同じ景色を見ながら同じ思いを共有していた  
私がピアノを弾く傍であなたは本を読んでいた  
ただそれだけなのに幸せだった

時は暖かく流れていた  
しかし、「別れ」の言葉が

流れていた時を止めてしまった  
止まってしまった時は

私をその場に縛りつけてしまった  
動きを止めた私は

風に吹かれてどんどん冷えていった  
心が凍っていった

固まって身動きの取れない思考が  
必死になって温もりを捜している  
失恋は余りにも冷たく痛い

### 《ことば座だより》

ことば座2015年予定

白井啓治

常世の国の恋物語百をめざして、ことば座を立ち上げたのは二〇〇六年十月であった。

ギター文化館での第一回公演は二〇〇七年二月、ギター文化館での公演はこれまで二十七回行って来て、常世の国の恋物語も三十四話となった。

今年二十八回目の公演は六月二十日・二十一日に決まった。演目は「緋桜怨節2015」である。

この緋桜怨節は、二〇〇七年十二月に常世の国の恋物語第十二話として初演したものであるが、ことば座三周年記念公演で再演している。今回は常世の国の恋物語の第三十五話として「緋桜怨節2015」にリニューアルしての公演となる。

十二話での緋桜怨節は手話朗読劇として書き下ろしたもので、手話舞は挿入されていなかった。今回改めて書き下ろす「緋桜怨節2015」では、小林幸枝の朗読舞が新たに加えられ、よりスケールアップした恋物語となる予定である。

ことば座では、ギター文化館のご協力を頂き、ことば座の定期公演で音楽を担当頂いた演奏家の方々をお招きして、ギター文化館のコンサートシリーズとして「里山と風の声コンサート」をこれまで6回にわたって行わせて頂いて来た。今年は、木下館長との企画打ち合わせで、8月7日の長崎原爆投下の日に映画「ひろしま」を同時上映する二部形式でコンサートを行う事になった。

風の声コンサートは、脱原発をテーマに朗読とギター演奏を予定している。ギター演奏は昨年引き続き北海道の若きギタリスト亀岡三典君。風の声としての朗読は、まだ決定事項ではないが、美浦村の市民劇団を主宰する市川紀行氏に、以前に朗読させて頂いき好評だった詩「ついに太陽をとらえた」の第二弾をお願いし、それを朗読できたらと考えている。

ふるさと風の会と同様、自分達の住む町から未来への希望を謳っていく一年にしたいものである。

## 《二十一言・もう一言》新春拡大版

今回は、紙面に余裕があることから、「こーなー」を新年拡大版として紹介したいと思う。

「命の鎖」は運んだが…

菅原茂美

今月号で、人生とは「命の鎖」(DNA)を先祖

から受け継ぎ、次世代へ引き渡す運び屋…と述べた。全ての生物は、この原理に基づき、懸命に運び屋に徹する。それゆえ人生<sup>100</sup>年は、長距離駅伝競走のタスキをつなぐ一コマにすぎない。更に運ばれたその遺伝子は、利己的で他を押しつけても自分だけは生き残ろうとする。その根本原理が全ての生き物を支配している。

さて子供が出来、孫もできて命の鎖は確実に子孫に引き継ぎ完了。しかしそれは物質体系としてのDNAを、機械的に継承したまでの事。その他に自分本来の「努力とか創造」により、この世に「知的な何か」を引き継ぐものがあつたのか?…と問われれば、ハイッ!これです!というものは、私にはちよいと見当たらない。

特に私は「自分とは何ぞや?」という永遠のテーマに取りつかれ、生物学・人類学などに足を踏み入れ、さ迷い歩いた。特にオパーリンの「生命の起原」に感動したが、今や多くの学説が混交し、定説は雲の中。私の生きていく中に、納得のいく答えが出るかどうかは不明である。

それゆえ、今日までに明確になったものを纏め上げ、私見を書き添えて活字で残しておく。そして人類の未来は如何にあるべきか…と地球儀俯瞰の検討を加えて書き残しておく。それが爺から孫への「知的継承」である。

現在、経済を優先する急加速の文明進化に、強い疑念を感じる。人口増加・資源枯渇は争いの元。世界はもっと緩やかに成長するべきと考える。孫がいつか読んでくれれば、真に嬉しいと思うから、拙文でも毎月、懸命に書き続ける。

## 「生命の起原」

菅原茂美

生命の誕生に関し今、最有力な仮説はオパーリンの「化学進化説」である。即ち原始地球の構成物質である多くの無機物から、低分子の有機物が生じる。それらは互いに重合して高分子有機物となり、「有機物スープ」を作る。そのスープの中で脂質などが「高分子集合体(コアセルベート)」を作り、コアセルベートは互いに離合集散していく中で「原始の生命の素」が誕生し、代謝系を有するものだけが生残した。

この説に対し、「パンスペルミア仮説(宇宙播種説)」があり、これは自然発生説を否定したものである。1906年スヴァンテ・アレニウスは、生命の起原は地球本体のものではなく、他の天体で発生した微生物の「芽胞」が、宇宙空間を飛来して地球に到達したものである…とした。

この宇宙には2000億個の銀河があり、その一つ我々の天の川銀河には、恒星が2000億個も存在する。恒星と惑星との距離、両者の質量・元素の構成など勘案し、我が天の川銀河だけでも地球タイプの生命が存在しうる惑星は、100万个も存在すると言われる。となれば、地球の生命の起原は、他の天体からもたらされた…と考えても不思議はない。この説は、DNAの二重螺旋構造を発見したフランシス・クリックや、SF作家のフレッド・ホイル等が支持している。今、この二者の主張を確認するため、「はやぶさ2号」が、太陽系創成当時の小惑星から採剤する為、過日発射された。

その他には「創生神話」があり神が生物を創つたと固く信じている人々もいる。未だにアメリカでは進化論の授業を禁じている州がある。

## 要(い)らん心配

打田昇三

当たり前のことかも知れないが国家は指導者によって命運が左右される。現代のイランは独自の原子力開発など危険な国に見られているが、昭和五十年代頃にはアメリカが最も信頼する同盟国であり米国土の軍事施設には其れを表わすモニュメントが置かれていた。その後、イラン・イラク戦争でアメリカに見放されたイランは国土の中央付近までイラク軍に攻められて終戦を迎える。

戦争で疲れ果てた国民の心を癒したのは日本のテレビ番組「おしん」である。どういうルートか知らないが、此の番組がイランのテレビに放映されて日本に劣らぬ人気を博していた。苦難に堪え忍ぶ姿がイラン国民の共感を呼ぶのだと言う。

尤も日本とイランとの関係は昨日今日のことでは無いらしく近いところでは日本が帝国主義・軍国主義国家になりかかる昭和十四年十月には、日本・イランの修好条約が調印されている。さらに遠く飛鳥天平時代にはペルシア(古代イラン)から日本に渡来した者が居たようで、仏教大学教授が「飛鳥・白鳳・天平時代に渡来したペルシア人について」という論文を書いておられる。

考えてみれば仏教の重要行事である「盆」はペルシア語の「盂蘭盆(うらぼん)ウラワン・死者の義とする祀り」らしいから、イランの行事そのものである。そういうことを思うと「おしん」の辛抱に感動する民族が色眼鏡で見られるような現代は残念にも何か違っていているのであろう。

## 歴史の国紀行

打田昇三

終戦までの日本では子供たちにまで「♪紀元は

二六〇〇年…」などと嘘を吹きこんでいたがイランの大使館が呉れた案内には「七〇〇〇年に近い長い歴史を持つ…」と書いてあり、それが本当らしいから悔しいけれども凄い。アリア民族が南下してきたのは古いことであろうから中近東諸国はそれぞれに長い歴史があつて当然ではあるが、

いずれも度重なる戦乱や侵略で貴重な遺跡が破壊されてしまふのは残念なことである。

隣国イラクまで一五〇キロほどの都市バフタランはかつてケルマンシャーと呼ばれ、クルド族の居住地として知られている。イランを現在のようイスラム教シーア派の国にしたサファビー王朝(十六世紀)の祖はクルド族ではないか?と言われている。この都市は国境に近いのでイラク空軍の爆撃で被害を受けたが、建物自体がビルの他は煉瓦や石積みが多いから復興も早いと思われる。

イラク戦との終戦後に日本では最初のツアーで此の街を訪れたのだが、ホテルが見つからない。四人のイラン人が三十分も掛けて探し出したのは野菜を店頭に並べた店で其処がホテルであった。風呂なし、トイレにペーパーなしの良い待遇で、夕食も諦めていたらイラン米を山にして山脈に羊肉で道路を付けた様な料理が出た。呆然としている客に店の親爺がサービスで生卵を投下してくれて名物料理だと言う。八百屋らしく部屋のテーブルには多くのオレレンジが無造作に置かれていた。七〇〇〇年の歴史が変わらず残るのを実感!

## ガンダーラの悲劇

打田昇三

十二月中旬にパキスタン北部のペシャワルで武装集団が銃を乱射し多くの子供たちを殺害した。

主義主張に基づく報復と言つても子供に何の罪があるのか!ペシャワルはアフガニスタンに通じるカイバル峠に近い都市で、付近にはアレキサンダーが伝えたギリシア文化から派生した初期仏教文化(ガンダーラ遺跡)の貴重なものが残っている。

私はアフガン戦争最中の昭和五十九年にペシャワルを訪れたのだが、カイバル峠が見たくて現地ガイドに危険と言われながら「少しでも…」と、ツアー仲間と車を頼んで出かけた。途中にはアフガン難民のキャンプや大砲を備えた城塞があり、或いは城壁で囲まれた地域部族の居住地があり、何となく異様な雰囲気です。峠の手前五キロ地点に到着した。記念?撮影をしてから「峠の方向には近づかないように!」ガイドに注意される迄も無く、どこから現れたのか怪しい男が銃を構えて寄つて来た。相手も我々を怪しいと思つたらしい。

「プリーズ・ストップ!」と書かれた看板の前に居たのであるから文句を言われる筋合いは無いのだが観光客は武器を持っていない。相手は銃口を我々に向けている。実弾が込めてあるらしいからどう見ても勝ち目は無い。慌てて退散した。

現在であれば「問答無用」で射殺されたかも知れないが、児童虐殺もゲリラも、仏教伝来の遺跡が残る貴重な地域で起こる筈の無い事件である。

## 征夷大将軍

打田昇三

織田信長の許で「猿」と呼ばれながら忠犬のように頑張っていた羽柴秀吉は、徳川家康を臣従させた後に源頼朝並みの「征夷大将軍」になりたかったのだが「此の職は源氏に限る」と断られた。秀吉は自分の出世を自慢したくて「俺は百姓の子

だ！」と言っていたのが仇になったのである。

怒らせてはマズイと気が付いた公家どもが御機嫌取りで「それでは関白に」と申し出た。関白は「天皇を補佐し百官を総べ萬機の政を行う―つまり天皇と同じ様に国政の頂点に立つのだが、実際には宮中で最上席に着くだけであろう。身分に箔を付けたい秀吉と御褒美が欲しい公家の願望が一致したから猿の顔をした関白太政大臣が出現したのである。それでも未練がましい秀吉は北条氏を攻めて小田原に来た時に、鶴が岡八幡宮の境内に祀られた白旗神社で源頼朝の木像を見て其の肩を叩きながら「天下の英雄は、俺と貴公だけだな！」と自慢げに言ったらしい。頼朝は不快だった？

源頼朝は囚人の身から苦勞をして天下を手中にしたので疑い深い。征夷大將軍になっても不安だったようで、勝手に「日本国総追捕使」という役職を設けて朝廷に認めさせた。現代だとアメリカのFBI長官のような様なものであろうか。

苦勞人の家康は天下人となるや余計な事は考えず「征夷大將軍」だけを手にして、後は歴代の幕府が独自の職制を徐々に決めていたようである。

## 【特別企画】

### 打田昇三の『私本平家物語』

巻第二 (3・2)

烽火之沙汰(ほうかのさた)のこと

勝手な解釈では有るが、平家物語があまり読まれないのは仏教用語や仏教の論理などが多用されているからであろうか。「物語」は理屈抜きのほう

が面白いのだが、この章段は其の代表的なものであり、教訓状で長々と父親(清盛)に説教をした忠義な孝行息子の平重盛が未だ足りずにイヤガラセのような行動に出る。そうした内容は、天台の高僧で和歌が上手で、史論「愚管抄(ぐかんしょう)」の著者でもある藤原一族出身の滋円(じえん)の仏教的思想が此の章段に反映されているからであると、歴史学の専門家は見ている。

偉いと言われる人物の話ほど退屈なものはないから飛ばしても良いのだが、タイトルの「烽火之沙汰」というのは紀元前七百年代、古代中国の周の国に居たとされる幽王と、褒姒(ほうじ)と言う名の愛人の史伝に出てくる烽火(のろし)を揚げること(緊急連絡)を根底にした話であるから退屈しぬぎにはなる。烽火を「狼煙」と書くのは狼の糞を乾燥させて燃やしたためと言われるが真偽のほどは分からない。此の章段では、糞は燃やさなかったけれども、父親に長々と説教をした後で、平重盛は家臣を試すようなクサイ行動を執るのだが童話の「狼少年」とは違い、重盛の決意は冗談抜きに悲壮であった。

前章段で重盛が清盛に厳しい意見を直言したことは、列座の武士たちにも大きな衝撃を与えた。大声は出せないまでも武士たちが何か言いかけて座が少しどよめき始めた。株主総会で会長と社長の親子が真つ向から対立している訳であるから、少なくとも課長以上の管理職社員はどういう行動をとるべきか、大いに迷う場面である。

そういう雰囲気を感じ取った平重盛は長々と父親に説教をしたことの締めとして密度の高い演説を行った。「既に父上を初めとして、この場に居る者たちは武装をしている。是は法皇の御所へ押

し寄せる為であろう。重盛は、その様なことでは父上のお供は出来ず、例え法皇が、どの様なお考えで平家の排除を企てられたにしても、重盛は法皇をお守りしなければならぬ立場にあります。(清盛に率いられた平家の軍勢に)叶わぬまでも法皇の御所(法住寺殿)を守護致します。

なぜかと言えば、此の重盛が先ず従五位下に叙されてから現在の大臣・大将に至るまで、全ては君の御恩により出世してきました。その恩の重い事を思えば是は千粒万粒の玉の重さを越えており、其の恩の深いことを考えれば、何度も染めた紅の色よりも勝る濃さだと思えます。幸いにして私にも命懸けで此の重盛を護ろう、身代わりになろうと心掛けて居る家臣が少しは居るでしょう。

然しながら、それらの者たちを引き連れて後白河法皇の御所(法住寺殿)の警備に就いたならば攻め寄せて来る(父・清盛が率いる)軍勢との合戦は避けられず、容易ならぬ事態となってしまう―ああ、それは何と悲しいことか!法皇に忠義を尽くそうとすれば、須弥山(じゆみせん)仏教世界の中心に聳えたとされる高山よりも尚高いとされる父の恩を忘れることになり、痛ましくも不孝の罪を逃れようとすれば、法皇に背き不忠の逆臣となってしまう。それを考えれば正に“進退きわまつて”どうして良いか分からなくなりますが。この上はどうか此の重盛の首を斬つて下さい。そうすれば私は法皇をお護りすることも出来ず、父上のお供で法皇の許へ参上する(法皇殿に攻め込む)ことも叶わなくなりません。

昔、漢(かん)の国で皇祖・劉邦と共に大漢帝国の創設に貢献して天子を補佐する“大相国(宰相)”の位に昇った蕭何(しょうが)は剣を帯し、靴を

履いたままで殿上に昇ることを許されていたのですが、皇帝の意向に背く進言をした為に監獄に繋がれてしまったことがあります——（中国古代史に依れば蕭何は、劉邦の皇后で悪名高い呂后と共謀して諸侯の弾圧なども行ったようである）——

この様な前例を顧みると平家一門は、富貴と言いい栄華と言いい、朝恩（天皇・法皇などから受ける恩恵）と言いい、重職と言いい、その全ての絶頂を極めることが出来たのですから、今後は家運が尽きることも無いとは言えません。『富貴の家には禄位（封禄と位階）が重なるが（禄位をむさぼるけれども）、年に何度も実がなる果樹は、其の根が必ず痛む』と中国の古書に書かれております。

是は誠に心細いことであり、私は何時まで生きて平家がそういう状況に置かれるのを（清盛が朝廷に対して不忠を働く因果により没落するのを）見たくは有りません。どうか、家臣に命じて此の中庭で重盛の首を斬って下さい……」

重盛は、そう言う到着衣の袖が濡れるほどに涙を流して父親の暴拳を諫めるのであった。太政大臣を務めた平清盛も、頼りにしている後継者の重盛に自分の行動を真つ向から否定されてしまったのでガックリとして言った。

「いやいや、其れまでは（重盛が言うような大それたことは）考えていない。（法皇を取り巻く悪党どもが申し上げることに法皇が騙されて何か不都合なことが起きることを案じたまでのことであるよ……）と言いつつすれば、重盛は「たとい何事が起きようとも天皇・法皇をどうにかしようなどと思つてはならないことです！」と釘を刺すように言うつと、つと立つて中門の方に向かった。

そこには清盛派に属する幹部社員級の武士が詰

めていた。重盛は其の武士たちに「今、重盛が父上に申し上げたことは、其の方たちも聞いたであろう。私は此処に来て知つた平家軍勢の出陣計画を取り鎮めようと思つたのだが（平家家中が）余りにも騒がしくなつていたので、此のまま帰ることにする。もし、その後で父上が重盛の諫言を聞かずに後白河法皇を迎えに行く、と言いい、それに従う者が有るならば、此の重盛の首が斬られるのを見てからにせよ！」と、無理な注文をつけてから自分の家臣を引き連れて小松殿に引き上げた。

重盛は自分の屋敷に戻つてから暫くして、留守番をしていた主馬判官盛国を呼び出して言った。

「此の重盛だけが、天下の大事を聞き出したぞ！重盛に忠節を尽くそうと思う者どもは『武装して参集せよ』と触れを回せ……」盛国は是に従つて平家一門を召集したので、聞いた武士たちは「普段から軽々しいことはなさらない重盛公がこういう緊急情報を発するのは余程の事情があるから……」と解釈して命令に従い、続々と駆け付けてきた。

原本には宇治、醍醐、大原など平家の武士たちの住んでいた地名が列挙してある。ともかく京都周辺の平家系武士が緊急召集をかけられて平重盛の屋敷へ集まつて来たのである。何しろ「急げ！」と言われていたから完全に武装している武士ばかりでは無い。鎧を着て兜を被らない者、矢だけ持つて弓を忘れた者、馬に鞍籠（くらぶみ）を付けるのが中途半端な者など多かつたが何とか短時間で軍勢が集結したのである。

この騒ぎは平清盛が居る西八条邸にも影響を及ぼし数千騎の武者が屯（たむろ）していたのに、清盛に何の説明もせず、武士たちはガヤガヤと騒ぎながら清盛の館を出て重盛邸に駆け付けてしまつ

たのである。気が付けば清盛の周りには非武装地帯中心部の様に軍人が一人も居なくなつていた。これには、さすがに清盛も驚いて側近の筑後守貞能を呼び寄せ「内府（内大臣）重盛は何を考へて軍勢を集めたのであるう？もしや此処で言つていたように私の許へ討手を差し向けに来るのではないかい……」と不安げである。

それを見た貞能はハラハラと涙を流して清盛を窘（たしな）めるように言う。「何を仰せですか、人も人に依ることです。どうして（重盛公が）討手を差し向けて来るようなことをしましょうか。（御本人も今朝がた此処で仰せられたことを後悔しておいでの筈です……）」

それを聞いた清盛は、重盛との仲が悪くなつてはいけないと思つたのであるう……法皇を迎えるなどと考えたことを思い留まり、武装を解いて普段のように出家した者の法衣姿に戻り、何事も無かつたように念仏を唱えていたけれども、その読経には心が籠つていなかった。

一方、重盛邸のほうでは、主馬判官盛国が命令を受けて、次々と駆け付けて来る武士たちの到着記録を付けていた。その数は一万余騎にも達していた。重盛は其の記録を見てから中門に出てきて集まつた武士団に対して次のように言った。

「主従の約束を忘れず、急な呼び出しに応じて駆け付けてくれたことを神妙に思う。実は異国に（此の場合、古代中国）私が今回、平家一門を緊急召集したような故事があつた——それをこれから申し述べる……」その様に前置きして平重盛は、中国に伝わる周の幽王と后（きさき）の褒似（ほうじ）の物語を武士団に語り聞かせた——この話は良く知られているが、平家物語は重要な部分を省略して書いて



ているので、原本に従わず「中国史」に依って概略を説明する。

★周の国は、古代中国で実在が確認されている最古の国「殷（いん）」に次いで紀元前一千年代から在ったとされる王国で幽王は五代目ぐらいの王になる。此の国で実施されていた爵位の制度を日本の明治政府が真似たのであるから昔でも野蛮国ではなかった。時代は西暦紀元前七百年代、西洋ではローマが都市国家として興った頃であるが、長安（現在の西安）に都を置いた西周（幽王の代に滅んだのが西周、幽王の後に洛陽に遷したのが東周）の幽王は暗君（馬鹿）であった。皇妃は居たのだが、属国に近い「褒（ほう）」と言う国から献上された美女（褒姒）に幽王が夢中になり国政も疎かになっていった。この褒姒は絶対に笑わないという特技？があり、幽王は褒姒を笑わすために苦心をしたが無駄であった。

其の頃は緊急事態を速報する手段として此の章段の冒頭に書いたように「烽火（狼煙）」を揚げていたのであるが或る時に一か所の烽火台が誤って何事も無いのに烽火を揚げてしまった。（平家物語では、兵乱が起って烽火を揚げたことになっている）緊急招集の信号であるから諸侯に率いられた軍勢が長安城に集結して来る。その様子を見た褒姒が初めて笑った。褒姒の笑顔は、また一段と美しかったので幽王は「笑顔見たさ」で何度も烽火を揚げさせた。「仏の顔も三度」という諺があるが「烽火（狼煙）の遊びも三度」で国王の指揮下にいた諸侯（軍勢）は烽火であろうが放火であろうが、信号が有っても城には来なくなつた。そして本当に敵が攻めて来た時に周は滅亡した☆

平家物語には褒姒が敵に捕らえられる寸前に野

狐となつて（化けていた正体を現わして）走り去つた：としてあるが、それは周の前に在った「殷（いん）国」の紂王（ちゆうおう）の愛人（姫己）だっきの物語と混同している。

さて緊急招集で集めた平家の軍勢に対して煙に巻いたような話をした平重盛は言葉を変えて家臣一同に申し渡した。「今後とも、何かあれば召集をかけるから、その時には今日のように速やかに集合して貰いたい。実はこの重盛が思いも掛けない重要なことを聞いたので集まって貰ったけれども、それは間違いであると分かった。御苦労であつたが是で解散をして貰いたい……」

実は、重要な事を聞いた、と言うのは嘘であり、本心は父親を諫めてきつい言葉も言つたので、万が一にも親子で合戦をする訳ではないが、自分に従う武士がどのくらい居るか、を確かめるために、一方では清盛が持つている法皇などへの謀反の心を和らげる為に武士たちを集めたのである。

「主君が相応しい人物でなくても、家臣は家臣の道を守らなければならず、父親が父親らしくなくても、子は子として親を大事にしなければならぬ。君のためには忠が有り、父のためには孝がある……」（現代感覚では反論が出そうだが）と孔子の教えに有るそうだが、後白河法皇も重盛の言動を聞かれて「今に始まつたことでは無いけれども重盛の考えは立派である。（当時の）諺にあるように、怨みをば恩を以て報じたり……」と仰せになられた。また、当時の人々は重盛を評して次のように言つた。「此の人の持つ果報（前世の因縁）は誠に素晴らしいものであつて、それにより大臣・大将となつた。容姿風采（日常の身のこなしなど）は人に優れ、才智学問も他に超絶していた……この人の様な生き方が他

の者に出来るであろうか？」

古来「国の誤に是を諫める家臣が有れば其の国は安泰であり、家に諫める子が有れば其の家は必ず正しい……」と言われていた（古書にある）この平重盛という人物は過去にも未来にも再び現れることが無いような優れた人物である。「烽火の沙汰」は其の様に結んで終わっているのだが、平清盛が横暴であつたから重盛の常識が目立つたもので庶民の立場からすれば烽火どころか線香花火程度の話になる。この二か月前には京都の大火で二万戸が焼かれ、庶民数千人が焼死している——にも拘らず、朝廷や公家（平家を含めて）は権力争いに終始していたことになる。（続く）

※打田兄の平家物語は現在巻第八まで進んでおります。来月より少し掲載量を拡大して行くつもりです。ご期待ください。

## 《ふる》

アレンジ蕎麦・蕎麦玄米料理のお店です。

（ギター文化館通り）

看板娘（犬）「うらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話0269-49-00000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>